

動詞句外 there 構文の統語構造*

神谷 昇

神田外語大学

本稿は英語の there 構文の 1 つで、動詞に PP と意味上の主語がこの順序で後続する動詞句外 there 構文 (outside verbal *there*-construction) を取り上げその統語構造を検討する。具体的には、この構文は場所句倒置構文と類似の特徴を持つことを考慮に入れ、この構文の派生には動詞の T への移動と PP の [Spec, vP] への移動が関与することを提案する。そして、場所句倒置構文と動詞句外 there 構文を PP の移動先の観点から比較・検討し、前者は「vP 外場所句倒置構文」、後者は「vP 内場所句倒置構文」であることを示す。

1. はじめに

よく知られているように、英語の there 構文には以下の 3 種類がある。まず、(1) に示すタイプの there 構文は be 動詞などの直後に意味上の主語が置かれ、事物の存在を表す。

- (1) a. There is a pen on the desk.
b. There exist a number of similar medieval crosses in different parts of the country.

((1b): Quirk, et. al. (1985: 1408))

また、(2) に示す there 構文は「動詞句内 there 構文 (inside verbal

* 本稿は日本英文学会第 79 回大会 (2007 年 5 月 20 日、於慶應義塾大学) と神田外語大学言語科学研究センターコロキウム (2007 年 8 月 2 日) で発表した「動詞句外 there 構文の派生について」を加筆・修正したものである。研究発表の際に聴衆の方々から貴重なご意見をいただいた。また、本稿を執筆するにあたり長谷部郁子氏、藤巻一真氏との議論は有益であった。ここに記して感謝する。なお、本稿における不備は筆者に帰せられるべきものである。

there construction)」と呼ばれ、非対格動詞の直後に意味上の主語が置かれてその出現や発生などを表す。

(2) *There developed several objections.* (Milsark (1974))

さらに、(3)に例示する *there* 構文は「動詞句外 *there* 構文 (*outside verbal there construction*)」と呼ばれ、*there* に動詞と PP が後続し、文末に意味上の主語が置かれる形式を持つ。

(3) a. *There walked into the bedroom a unicorn.*

(Milsark (1974))

b. *There came to his mind her beautiful and intelligent face.* (Quirk et. al. (1985: 1409))

この構文は後述するように、ある事物や状況を談話に導入する提示文(*presentational sentence*)として機能することが知られている。

本稿は上記の *there* 構文のうち、(3)に挙げた動詞句外 *there* 構文について、英語の場所句倒置構文(*locative inversion construction*)との類似点を示し、Collins (1997)の場所句倒置構文の分析と長谷川(2008)が提案する提示文(具体的には英語の場所句倒置構文と日本語の中立叙述文)の分析を考慮に入れて、その統語構造を検討する。そして、この構文の派生には動詞の T への移動と VP 内に基底生成された PP の *vP* の指定部への移動が関与することを提案する。

以下、2 節では、動詞句外 *there* 構文と場所句倒置構文との類似点を概観する。3 節では本稿の分析の基盤となる Collins (1997)と長谷川(2008)を概観し、動詞句外 *there* 構文の分析を提示する。4 節はまとめである。

2. 場所句倒置構文と動詞句外 *there* 構文の特徴

本節では(4)に例示する場所句倒置構文と前節の(3)に挙げた

動詞句外 *there* 構文の特徴を概観し、2つの構文の共通点を提示する。

- (4) a. Under the doormat lay the key to the front door.
b. Into the room walked John.

(Coopmans (1989))

はじめに動詞の種類に対する制限を挙げることができる。よく知られているように、場所句倒置構文には非対格動詞を使用することができるが、非能格動詞は許されない (Coopmans (1989), Bresnan (1994), Collins (1997)など)。この事実は(5)に例示されている。

- (5) a. On the corner was {standing / *drinking} a woman.
b. Toward me {lurched / *looked} a drunk.
c. Into the hole {jumped / *excreted} the rabbit.

(Bresnan (1994))

場所句倒置構文と同様の制限が動詞句外 *there* 構文にも見られる。このことは(6)と(7)に示されている。

- (6) a. It was at this time too that there *appeared* in Europe the system of notation in which the exact time-value of a note is indicated by a lozenge on a pole.
b. It was a precious respite; for during it there *arose* in Greece the democracy of Athens.

(上記2例: British National Corpus (BNC); イタリアックは筆者による)

- (7) *There *played* in the room a boy.

cf. *There played a boy in the room.

(Coopmans (1989: fn. 22); イタリアックは筆者による)

なお、高見・久野(2002)は以下のような例を引き、上述の

制限は動詞句外 *there* 構文に見られないことを論じている。

- (8) a. Suddenly *there ran out of the bushes a grizzly bear.*
(Lumsden (1988: 38); イタリックは筆者による)
- b. *There walked into the bedroom a unicorn.*
(Milsark (1974); イタリックは筆者による)

さらに彼らは(9)の例を引用し、他動詞もこの構文に使用できると主張している。

- (9) Suddenly *there entered the hall an ugly old man.*
(Levin (1993: 50); イタリックは筆者による)
- cf. *An ugly old man entered the hall.*

(8)と(9)については3.2節で詳しく論じるので現段階ではこれ以上検討しない。

2つめに、場所句倒置構文に助動詞を使用することができない(Coopmans (1989)など)と同様に、動詞句外 *there* 構文にも助動詞を使用することはできない(Aissen (1975))。この事実はそれぞれ(10)と(11)に示されている。

- (10) a. *Down the hill may roll the baby carriage.
b. *Down the stairs has fallen the baby.
(Coopmans (1989))

- (11) *There { did / may / will step } out in front of his car a small child.
 { has stepped }
(Aissen (1975))

3点目の特徴として、文の機能を挙げることができる。場所句倒置構文は談話に新情報を導入する提示文として機能することが知られている。たとえば、(12A)ですでに *Rose* が談話に導入されているので、*Rose* を旧情報として扱っている

(12C)は自然であるが、改めてそれを談話に導入する(12B)は不自然に感じられる(Bresnan (1994))。

(12) A: I am looking for my friend Rose.

B: #Among the guests of honor was sitting Rose.

C: Rose was sitting among the guests of honor.

(Bresnan (1994))

動詞句外 *there* 構文も場所句倒置構文と同様に新情報を導入する提示文として機能する(Quirk et al (1985)など)。例えば(13) (= (3b))で、文末に置かれた *her beautiful and intelligent face* は新情報として解釈される。

(13) There came to his mind her beautiful and intelligent face.

(Quirk et. al. (1985: 1409))

ここまで概観してきたように動詞句外 *there* 構文は場所句倒置構文と似た特徴を持つことから、前者の派生に後者と同じような操作が関与しているのではないかと推察される。このことから、次の 3 節では場所句倒置構文を扱っている Collins (1997)と長谷川(2008)を概観し、それらを考慮に入れて動詞句外 *there* 構文の派生を検討する。

3. 動詞句外 *there* 構文の派生

本節では英語の場所句倒置構文を分析した Collins (1997)と、提示文、特に英語の場所句倒置構文と日本語の中立叙述文の統語構造を分析した長谷川(2008)を概観し、それらを踏まえて動詞句外 *there* 構文の統語構造を検討する。

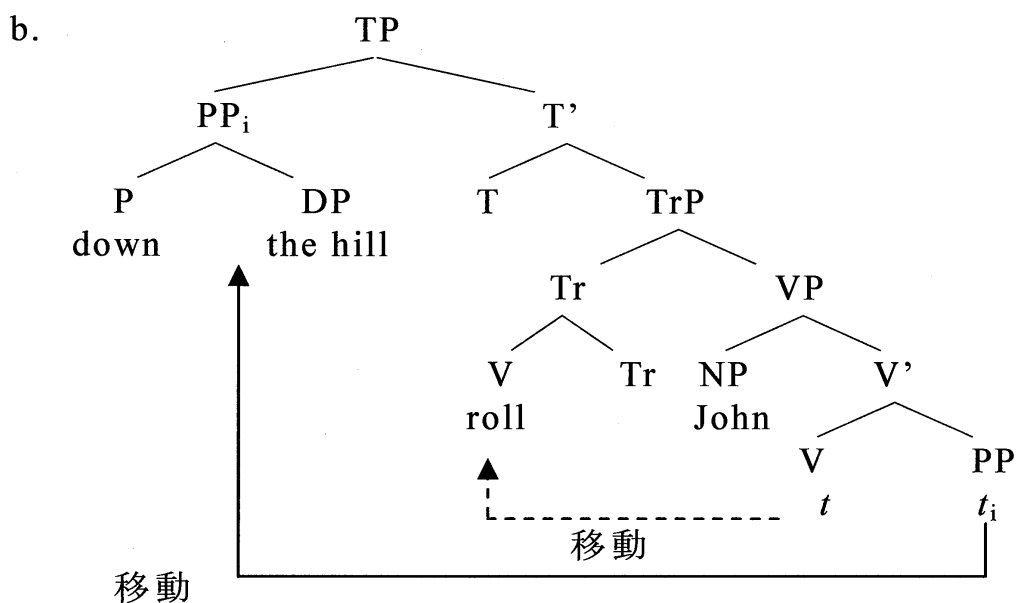
3. 1 場所句倒置構文の統語構造

この節では Collins (1997)の場所句倒置構文の分析を概観する。Collins は場所句倒置構文に非対格動詞が使用されることに着目し、非対格動詞であれば VP 内に基底生成される意味

上の主語の名詞句と場所を表す PP が同じ領域内にあるので、どちらも TP の指定部に移動することが可能であり、顕在的統語部門 (overt syntax) で PP が TP の指定部に移動した場合に場所句倒置構文が派生されると主張している。この提案に従えば、例えば(14a)の構造は(14b)のようになる。¹

(14) a. Down the hill rolled John. (Collins (1997))

cf. John rolled down the hill.



(Collins (1997)を修正 ; Tr(P) = Transitive (Phrase) ≡ v(P))

この分析で特筆すべき点は、意味上の主語の John は基底生成位置から移動せず、かわりに PP が左方移動することで場所句倒置構文が生成されるということである。ただし、後述するように「文タイプの表示」を考慮に入れるならば、PP の移動先は Collins (1997)の主張するような [Spec, TP]ではなく、A' 位置の [Spec, ForceP] (従来の [Spec, CP])であると考えるのが自然であり、本稿もそれに従う。

¹ なお、Collins (1997)は、非顕在統語部門 (covert syntax) では Tr に付加した動詞 roll は T に移動するとともに、VP 内に取り残された意味上の主語の素性が T に牽引され、そこで T によって照合されると提案している。

3. 2 提示文の統語構造：長谷川(2008)

長谷川(2008)は、(15)に繰り返す英語の場所句倒置構文の統語構造を Rizzi (1997)などで提案されている精緻化された CP 構造を踏まえて分析している。

- (15) a. Under the doormat lay the key to the front door.
b. Into the room walked John.

(Coopmans (1989))

具体的には、(16)に示すように従来の CP は下位の「定時制 (FinP)」と連動して文のタイプ（疑問、感嘆など）を表す Force(P)や、話題を表す Top(P)、焦点を表す Focus(P)、文の定時制を表示する Fin(P)から構成されること²、および、文タイプの表示には(17)の原則が働いていること（Hasegawa (2005)など）を仮定した上で、長谷川(2008)は提示文である英語の場所句倒置構文の派生には、(18)のような操作が関与することを提案している。

- (16) [_{ForceP} [_{TopP*} [_{FocusP} [_{TopP*} [_{FinP} [_{IP} ...

- (17) 語用機能(Force)の統語的明示：

語用機能(Force)は、少なくとも、CP システムの「主要部」もしくは「指定部」で表示されなければならない。

- (18) a. 提示文は、疑問文とは異なる独立した文タイプで、Force に [+presentational] ([+P])素性を持つ。([+P]素性は疑問文の素性とは相容れない。)
b. Force の [+P]素性は、[(17)]の原則に従い、「指定部」か「主要部」で可視的に照合される。
c. 英語の[場所句倒置構文]：「眼前の場」を提示する PP が「指定部」へ移動することにより、[+P]素性を「指定部」で満足させる。((18)：長谷川(2008: 74))

² (16)の構造でアスタリスクはその句が繰り返し生成可能であることをあらわしている。

英語の場所句倒置構文は(18)に従うと(19)のような構造を持つ。

- (19) [_{ForceP} Down the street_i [_F [+P] [_{FinP} [_{Fin} rolled_v [_{TP} the baby carriage t_v [_{vP} t_v t_i]]]]]] (長谷川(2008))

つまり、[+P]素性は ForceP の指定部の PP によって照合されるが、その PP はある物体が存在する場所や移動の方向（いわば眼前の状況／場）をあらわす。そして、このような PP を要求するのは非対格動詞であることから、2 節で概観した動詞のタイプに対する制限が説明される。例は(20)として繰り返す。

- (20) a. On the corner was {standing / *drinking} a woman.
b. Toward me {lurched / *looked} a drunk.
c. Into the hole {jumped / *excreted} the rabbit.

(Bresnan (1994))

また、この構文は特殊な時制解釈を受け、過去形は「眼前での直前完了事象」、現在形は「現在進行事象」をあらわすために(22)に示すように yesterday や often のような副詞とは共起しないが、この事実は Force の [+P] が Fin の時制解釈を指定することに起因し、それに関係して動詞は Fin にまで移動すると長谷川は主張している。

- (21) a. The baby carriage rolled down the street yesterday.
b. The fateful wheel often spins round and round.
(22) a. *Down the street rolled the baby carriage yesterday!
b. *Round and round often spins the fateful wheel!

(cf. Emonds (1976))

なお、詳細は長谷川(2008)に譲るが、長谷川は(23)に例示する日本語の中立叙述文も取り上げ、(18a, b)に加えて(24)に提

示する操作がこの構文の派生に関与することを提案している。

- (23) a. 花子ガ来た。
b. おや、あそこに太郎ガいる。
c. 空ガ青いね。
d. 大変だ、太郎ガ病気だ。 (久野(1973: 32))

(24) 日本語の主文の[中立叙述]構文: 非対格述語、テイル形、「伝達」終助詞が「主要部」に生起することで、[+P]素性を「主要部」で満足させる。(長谷川(2008: 74))

それによれば中立叙述文は(25)の統語構造を持つことになる。

- (25) a. [_{ForceP} [_{FinP} [_{IP} [_{vP} 手紙ガ t_v] t_v] t_v] 来た _v-[+P]]
b. [_{ForceP} [_{FinP} [_{IP} [_{vP} 太郎ガ 手紙を t_v] t_v] t_v] 書いてイル _v-[+P]]
c. [_{ForceP} [_{FinP} [_{IP} [_{vP} 太郎ガ 手紙を t_v] t_v] 書いた] よ-[+P]]
(長谷川(2008))

ここで重要なのは Force の[+P]素性はこの場合、動詞（主要部）によって照合されるという点である。このため、英語の場所句倒置構文と違ってその照合に PP は必要とされない。また、[+P]素性は動詞ばかりでなく「ている」や終助詞も照合できるので、動詞の種類に対する制限は観察されない。

次節では上記の Collins (1997)と長谷川(2008)の提示文、特に場所句倒置構文の分析を踏まえて、動詞句外 there 構文の統語構造を検討する。

3. 3 動詞句外 there 構文の統語構造

この節では(26) (= (3))として繰り返す動詞句外 there 構文の統語構造を提示する。

- (26) a. There walked into the bedroom a unicorn.
 (Milsark (1974))
- b. There came to his mind her beautiful and intelligent
 face. (Quirk et. al. (1985: 1409))

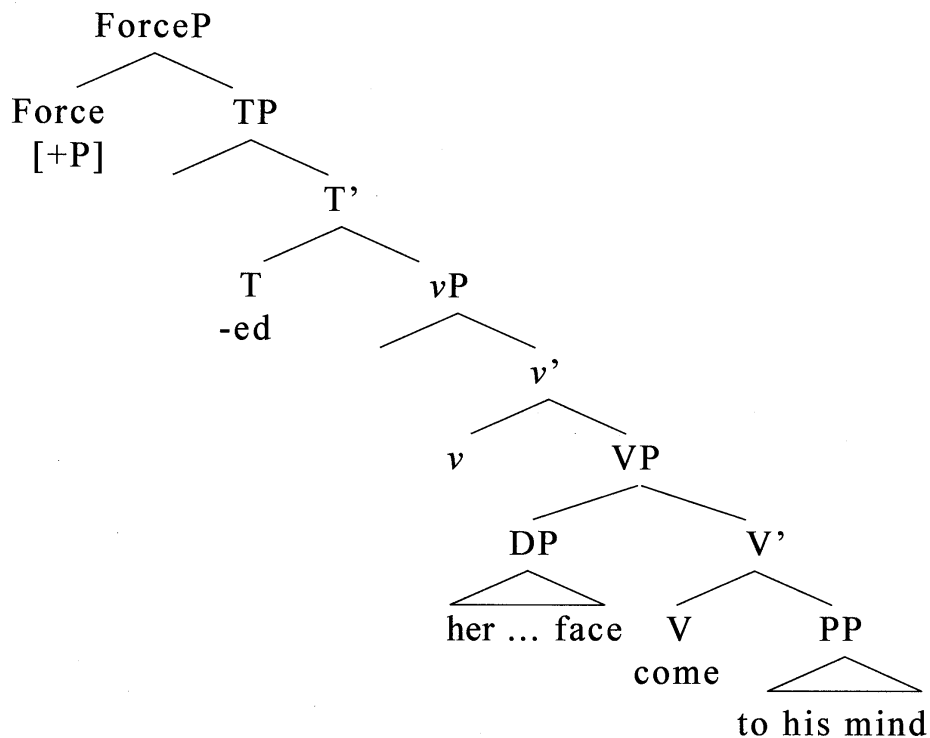
具体的には、それぞれ 3.1 節と 3.2 節で概観した Collins (1997) と長谷川(2008)の場所句倒置構文の分析を考慮に入れて、動詞句外 *there* 構文の派生には(27)に示す操作が関与していることを提案する。

- (27) a. 動詞句外 *there* 構文の派生には、VP 内に基底生成された PP の [Spec, vP] (外項が併合される位置) への左方移動 (=A 移動) が関与する。VP 内に基底生成された意味上の主語は移動しない。
- b. T の EPP 素性を満たすために、TP の指定部に *there* が併合される。
- c. 動詞は *v* を経由して T にまで移動する。
- d. フェイズの主要部 Force にある [+P]素性は別のフェイズの主要部である *v* に継承され、vP の指定部にある PP と一致することで動詞句外 *there* 構文は提示文として解釈される。

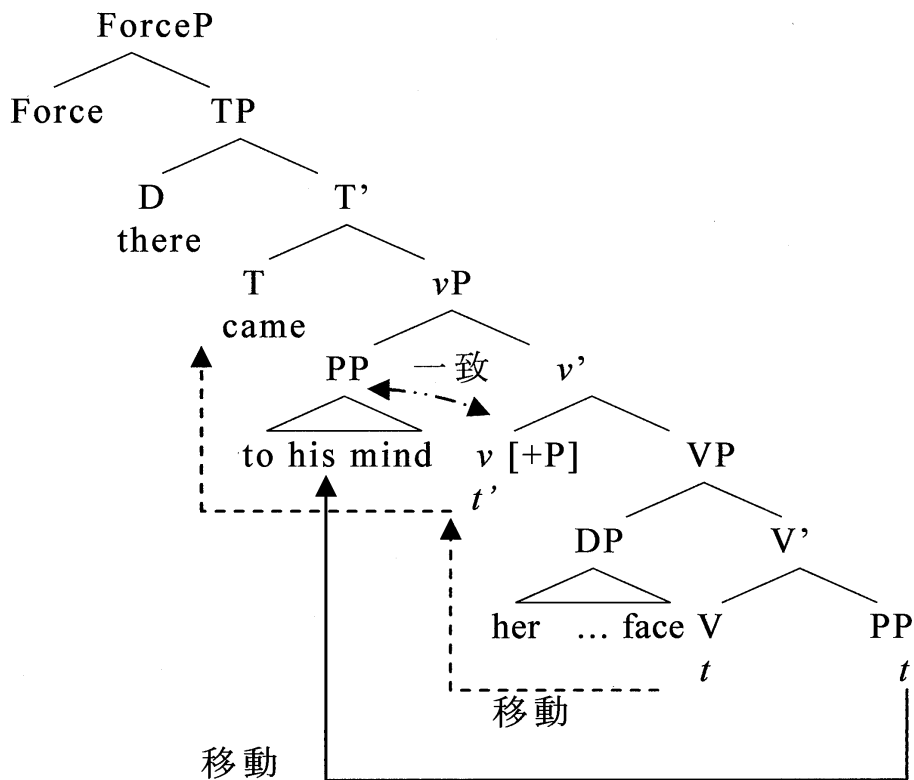
(27)の提案を図示したものが(28)である。

(28) a. There came to his mind her beautiful and intelligent face. (Quirk et. al. (1985: 1409))

b. 基底構造



c. スペルアウト時の構造



以下では2節で概観した事実がこの分析でどのように説明できるのかを見ていきたい。

まず、この構文に課せられる動詞の制限について検討する。例はそれぞれ(29)、(30)としてここに繰り返す。

(29) a. It was at this time too that there *appeared* in Europe the system of notation in which the exact time-value of a note is indicated by a lozenge on a pole.

b. It was a precious respite; for during it there *arose* in Greece the democracy of Athens.

(上記2例: British National Corpus (BNC); イタリアックは筆者による)

(30) *There *played* in the room a boy.

cf. *There played a boy in the room.

(Coopmans (1989: fn. 22); イタリアックは筆者による)

この対比は同族目的語や way 構文が許されるのは非能格動詞に限られ、非対格動詞とは共起しないという事実(前者は Levin and Rappaport Hovav (1995) など、後者については Levin (1993)、Levin and Rappaport Hovav (1995) などを参照)と並行的に説明できる。前者の例は(31)と(32)に、後者の例は(33)と(34)に示されている。

(31) a. Louisa *slept* a restful sleep.

b. Malinda *smiled* her most enigmatic smile.

(32) a. *The glass *broke* a crooked break.

b. *The actress *fainted* a feigned faint.

((31)と(32): Levin and Rappaport Hovav (1995: 40); イタリアックは筆者による)

(33) a. They *shopped* their way around New York.

b. He *worked* his way through the book.

- (34) a. *The children *came* their way to the party.
 b. *They *disappeared* their way off the stage.
 ((33)と(34) : Levin (1993: 99) ; イタリアックは筆者による)

例えば(31a)の派生は(35)に示すようなものになり、基底構造で V の補部の位置が空いているのでそこに同族目的語(CO)を挿入することができる。

- (35) a. Louisa slept a restful sleep.
 (Levin and Rappaport Hovav (1995))
 b. 基底構造
 [TP [T -ed] [vP Louisa v [VP [V sleep] _____]]]
 vacant →
 c. スペルアウト時の構造
 [TP Louisa_i [T -ed] [vP t_i v [VP [V sleep] [CO a restful sleep]]]
 同族目的語の挿入 →

一方、(36)に示すように、非対格動詞では目的語の位置がすでに表層主語により占められているので、そこに同族目的語を挿入することができない。

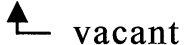
- (36) a. *The glass broke a crooked break.
 (Levin and Rappaport Hovav (1995)) (= (32a))
 b. 基底構造
 [TP [T -ed] [vP v [VP [V break] [DP the glass]]]
 not vacant →
 c. スペルアウト時の構造
 [TP [DP the glass] [T -ed] [vP v [VP [V break] t_{DP}]]]
 *同族目的語の挿入 →

以上の同族目的語構文の分析を踏まえると、動詞句外 there

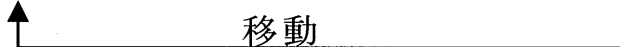
構文に対する非対格性制約は次のように説明できる。つまり、(37)に示されているように非対格動詞の意味上の主語は VP 内に生成されるため [Spec, vP] が空いており、そこに PP を移動させることができるが、非能格動詞の場合には (38) に示すように [Spec, vP] が主語によってすでに占められており、そこに PP を移動させることはできない。³ (以下の構造では議論に関係ない部分は省略する。なお、(27)で提案したように動詞はスペルアウト時には T に移動しているため、下記の構造の V や v の位置には痕跡が残されている。以下同様。)

(37) a. There came to his mind her beautiful and intelligent face. (Quirk et. al. (1985: 1409))

b. 基底構造

[_{VP} ___ v [_{VP} [_{DP} her ... face] [_V come] [_{PP} to his mind]]].


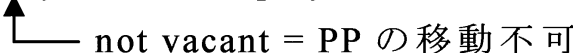
c. スペルアウト時の構造

[_{VP} [_{PP} to his mind] t' v [_{VP} [_{NP} her ... face] t_V t_{PP}]]].


(38) a. *There played in the room a boy.

(Coopmans (1989: fn. 22))

b. 基底構造

[_{VP} [_{DP} a boy] v [_{VP} [_V play] [_{PP} in the room]]]].


なお、2 節で述べたように、高見・久野(2002)は、非能格動詞であっても動詞句外 there 構文が許されると主張し、(39)

³ 虚辞の there の位置については [Spec, TP] にあると考えられる。このことの根拠として、以下に示すように虚辞の there を含む文で助動詞を前置して疑問文にすることができるという事実を挙げることができる (Radford (1997))。

(i) Is there nobody living there? (Radford (1997))

cf. There is nobody living there.

there が [Spec, TP] にあるということを考慮に入れると PP の移動先はそれよりも下の位置ということになる。そのため本稿では PP の移動先を [Spec, vP] と仮定している。

のような例を挙げているが、run のような移動の様態を表す動詞に PP が後続した場合には「非対格動詞」として振舞うことが知られているので、本稿でもそれを仮定し、例えば (39b) は (40) のような過程を経て生成されると考える。

- (39) a. Suddenly there *ran* out of the bushes a grizzly bear.
 (Lumsden (1988: 36); イタリックは筆者による)
- b. There *walked* into the bedroom a unicorn.
 (Milsark (1974); イタリックは筆者による)
- (40) スペルアウト時の構造
 $[_{VP} [_{PP} \text{into the bedroom}] t'_V [_{VP} [_{DP} \text{a unicorn}] t_V t_{PP}]]$.
-

高見・久野(2002)は動詞句外 *there* 構文に使用できる他動詞の例を指摘していると 2 節で述べた。例は(41)として再録する。

- (41) Suddenly there *entered* the hall an ugly old man.
 (Levin (1993: 50); イタリックは筆者による)
- cf. An ugly old man entered the hall.

(41)の例について、本稿では動詞 *enter* は目的語を伴う他動詞のように一見思えるが、内項を 2 つ取る非対格動詞であり、(40)の例と同様に派生されることを主張する。その根拠として派生名詞における項の標示にかんする事実が挙げられる。よく知られているように、派生名詞では基体の動詞の内項は *of* で、外項は *by* で標示される。

- (42) The destruction *of* the city *by* the enemy
 cf. The enemy destroyed the city.

そして、*enter* の名詞形である *entrance* や *entry* における「主語」は(43)から分かるように *by* ではなく *of* で標示される。

- (43) a. Much of the reason for the recent surge in popularity of upmarket ice-creams is due to the entrance *of* a bold newcomer to the market: Haagen-Dazs.
- b. The entry *of* young farmers (otherwise prohibited by speculative land markets) into agriculture is seen as important in France.

(BNC;イタリックは筆者による)

(42)の事実を踏まえると、この例から *enter* の主語は内項であることが導き出せる。

enter の主語は内項であるという主張は「意味役割付与の均一性仮説 (The Uniformity of Theta Assignment Hypothesis (UTAH); Baker (1988))」からも支持される。

- (44) The Uniformity of Theta Assignment Hypothesis (UTAH): Identical thematic relationships between items are represented by identical structural relationships between those items at the level of D-structure. (Baker (1988: 46))

UTAH は同じ意味役割を担う項は構造上、同じ位置に生じることを規定している。そして、移動する物体である主題項 (Theme)は(45)から分かるように内項の位置に生じるが、*enter* の主語も「移動する物体」として解釈されることを考えれば、(46)のようにその基底生成位置は VP 内であると考えるのが自然であろう。

- (45) a. John arrived at the station.
- b. [TP [T -ed] [_{VP} V [_{VP} John [_V arrive] at the station]]]
- Theme

- (46) a. An ugly old man entered the hall.
 b. [TP [T -ed] [_{vP} V [_{VP} [_{DP} an ugly old man] [_V enter] the hall]]]

Theme

以上の議論から、enterの主語はVP内に基底生成される内項であることが結論付けられる。なお、enterの「目的語」は名詞句に見えるが音形を伴わないPを主要部とするPPであると仮定する。⁴ この結果、(47a)として繰り返す(41)は(47b, c)の派生を経ることになる。

- (47) a. Suddenly there entered the hall an ugly old man.
 (Levin (1993: 50))

b. 基底構造

[_{vP} ____ v [_{VP} [_{DP} an ugly old man] [_V enter] [_{PP} Ø_P the hall]]].
 ↑ vacant

c. スペルアウト時の構造

[_{vP} [_{PP} Ø_P the hall] t'_V [_{VP} [_{DP} an ugly old man t_V t_{PP}]]].
 ↑

つまり、(47a)もこれまで検討してきた例と同様に、[Spec, vP]に「目的語」のPPが移動することで動詞句外 there構文が生成されると考えることができる。

次に動詞の位置について検討する。2節で概観し、(48)に繰り返すように動詞句外 there構文は助動詞と共起できないが、この事実は動詞がすでにTに移動しているところに助動詞を挿入しているために非文になると考えることができる。

⁴ 音形を伴わないPはenterが名詞化されると音形と伴って具現化する。例えば以下に再録する(43a)のto the marketのtoや、(43b)のinto agricultureのintoがこれに該当する。

- (i) a. Much of the reason for the recent surge in popularity of upmarket ice-creams is due to the entrance of a bold newcomer to the market: Haagen-Dazs.
 b. The entry of young farmers (otherwise prohibited by speculative land markets) into agriculture is seen as important in France.

(BNC;イタリックは筆者による) (=43)

構造は(49)に示されている。

(48) *There { did / may / will step } out in front of his car a small child.
 { has stepped }

(Aissen (1975))

(49) * $[_{TP} \text{ There } [_T [_T \text{ did}] [_V \text{ step out}]] [_{VP} \text{ PP } t'_V [_{VP} \text{ DP } t_V t_{PP}]]]$.

3.2節では、英語の場所句倒置構文においては[Spec, ForceP]にあるPPがForceの[+P]素性を満たすことでこの構文が提示文として機能するという長谷川(2008)の分析を概観した。動詞句外 there 構文も提示文として機能することから同様のメカニズムが働いていると考えられるが、この構文は場所句倒置構文とは異なり、PPが文頭に生起していないためにどのようにしてForceの[+P]素性が満たされるのかを明らかにしなければならない。このことを検討するにあたり、長谷川(2007)の1人称の省略の分析を概観する必要がある。日本語では主語や目的語が省略されることがあるが、省略される要素の人称がその可否を左右することを長谷川は指摘している。具体的には、(50)と(51)に例示するように主語については1人称も3人称も省略が許されるのに対して、(52)と(53)の対比から分かるように目的語の名詞句の省略は1人称の場合は許されない。

- (50) a. (顔を腫らしているAが、「どうしたの?」と問われて)
 A:「 \emptyset 花子に殴られちゃったんだ。」(\emptyset =僕は)
 b. (Aが、教員室に行く理由を問われて)
 A:「 \emptyset 先生に呼ばれたんだ。」(\emptyset =私は)

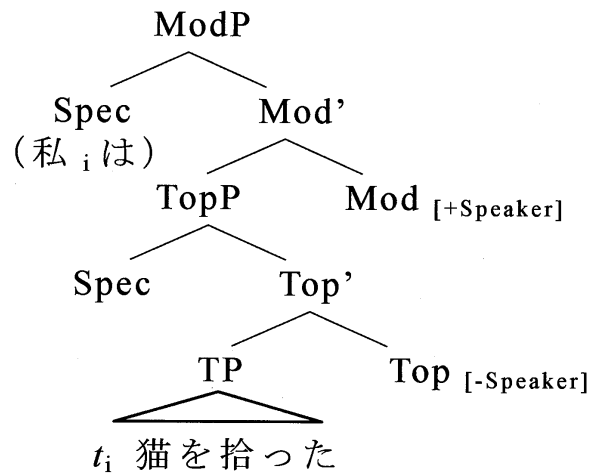
- (51) a. (A が、顔を腫らしている太郎を見た人に、「太郎は
どうしたの?」と問われて)
A:「{ \emptyset / 太郎は} 花子に殴られちゃったんだ。」
- b. (A が、友人の花子が教員室に入って行った理由を
問われて)
A:「{ \emptyset / 花子は} 先生に呼ばれたんだ。」
- (52) a. (顔を腫らしている A が、「どうしたの?」と問われて)
A:「花子が { $*\emptyset$ / 僕を} 殴ったんだ。」
- b. (A が、教員室に行く理由を問われて)
A:「先生が { $*\emptyset$ / 私を} 呼んでるの。」
- (53) a. (A が、顔を腫らしている太郎を見た人に、「太郎は
どうしたの?」と問われて)
A:「花子が { \emptyset / 太郎を} 殴ったんだ。」
- b. (A が、友人の花子が教員室に入って行った理由を
問われて)
A:「先生が { \emptyset / 花子を} 呼んでるの。」

((50) – (53): 長谷川(2007))

これらの事実から長谷川は 1 人称と 3 人称はそれぞれ別の主要部が認可していると提案する。具体的には、1 人称は CP 領域の Mod (Modality) が、3 人称は Top が認可し、Mod または Top と「一致」した要素は省略の対象となることを主張している。これに従うと例えば(54a)は(54b)の構造を持つ。

(54) a. (私は) 猫を拾った。

b.



(長谷川(2007: 337 – 338 を修正)

なお、(52)で1人称が省略できないことについて長谷川は、目的語位置の1人称がCP領域のModから「遠い」位置にあるために省略も許されないと論じている(ただし、以下で見るように、補助動詞を伴うと1人称目的語の省略が可能になる)。

長谷川はさらに、補助動詞「くれる」が伴った場合には(間接)目的語であっても1人称の省略が可能になることを指摘した上で((55)参照)、この場合には「くれる」がその指定部にある間接目的語(受益者)の1人称と[+Speaker]素性について一致すると同時に、1人称を認可する主要部であるModに「くれる」が移動・一致することで間接目的語の1人称の省略が可能になると主張している。このことを図示したものが(56)である。

(55) a. A: あなた_iもそのこと知っているんですね。

B1: *ええ、太郎が {私_iに / ø_i} 教えたの / 伝えたの / 知らせたの。

B2: *ええ、私_iには太郎が教えたの / 伝えたの / 知らせたの。

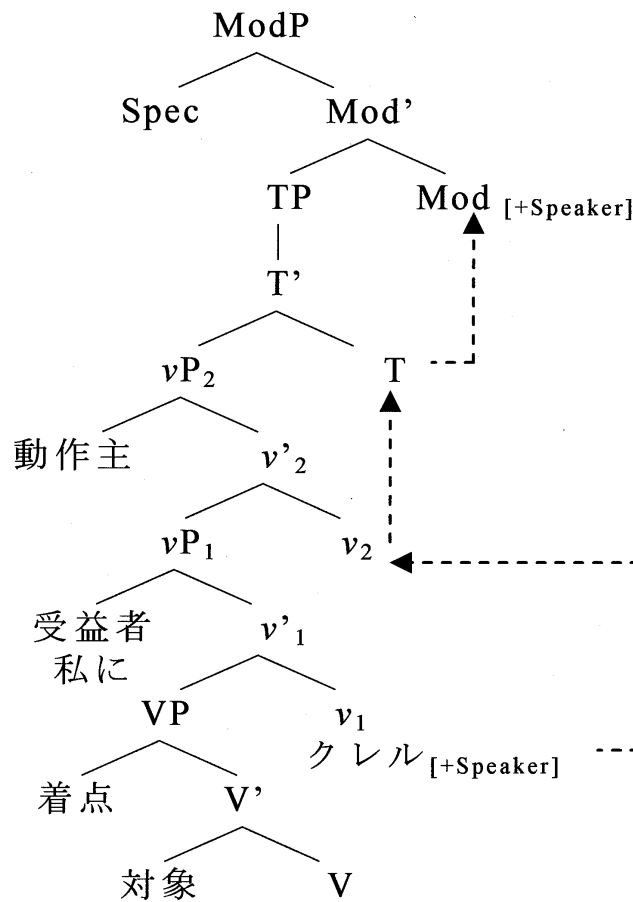
B3: ええ、太郎が {私_iに / ø_i} {教えて / 伝えて /

知らせて} {クレタ/キタ} の。

- b. A: あなた_iもこのパーティーに来てたのですね。
 B1: *ええ、花子が {私_iを/ø_i} 招待したのです。
 B2: *ええ、私_iは花子が招待したんです。
 B3: ええ、花子が {私_iを/ø_i} 招待してクレタんです。

(長谷川(2007))

(56)



(長谷川(2007: 347 – 348 を加筆・修正)

なお、(56)で「くれる」はフェイズの主要部 v であり、Mod もフェイズを構成する CP 領域内の一要素であることに注意されたい。つまり、「くれる」と Mod の間の「一致関係」は隣接するフェイズ同士の関係性と捉えることができると長谷川は述べている。

本稿は以上で概観した長谷川(2007)の一人称の省略の分析

を動詞句外 **there** 構文の分析に援用し、同様のメカニズムが文タイプの表示にかかわる素性にも適用できると考える。つまり、(27d)で述べたように、フェイズの主要部 **Force** にある [+P]素性が別のフェイズの主要部である **v** に継承された後、**vP** の指定部にある **PP** と「間接的に」一致することで提示文としての解釈が生じると考えたい。⁵

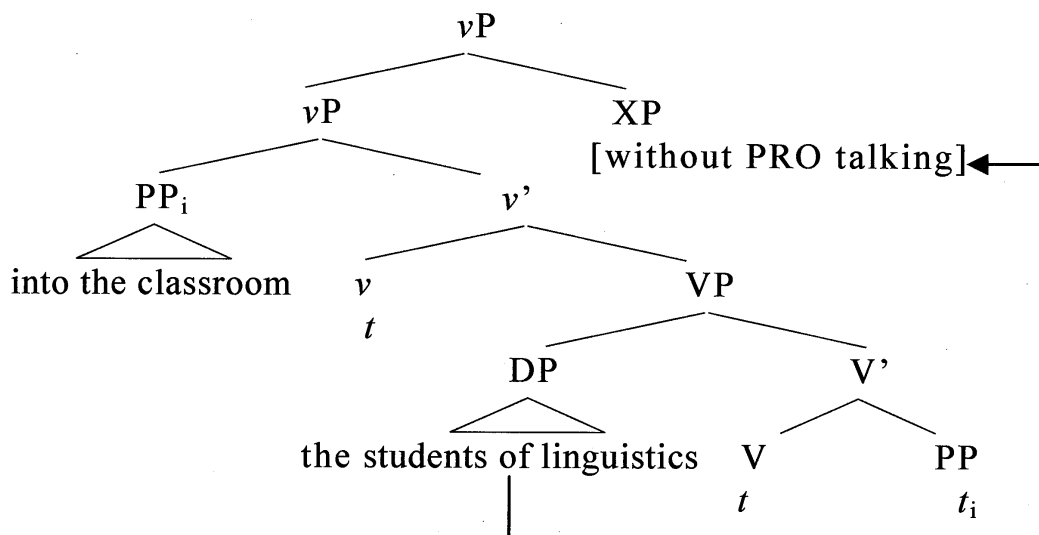
この節の議論を終える前に、本稿の分析の帰結を述べる。本稿ではこれまでの議論から明らかのように、動詞句外 **there** 構文では意味上の主語 **DP** は構造上、**PP** よりも低い位置にあることを主張している。このことを支持する例として(57a)のコントロールに関する事実と、(57b)の否定極性表現 (**Negative Polarity Item**) に関する事実が挙げることができる。前者は、意味上の主語である **the students** が付加詞 **without talking** 内にあると考えられる **PRO** (**talking** の主語) をコントロールできないことを表している。同様に、(57b)では **none** が付加詞内の否定極性表現 **any** を認可できないことを表している。

- (57) a. ??There ran into the classroom the students of linguistics without talking.
b. ??There ran out of the court none of the defendants during any trials.

例えば、(57a)の構造は(58)であると考えられるが、**DP** が **VP** 内にとどまっているために **vP** に付加している付加詞内の **PRO** を **c-統御** できず、コントロール関係が成立しないと考えることができる。(57b)も同様である。

⁵ ただし、文表示に重要な役割を果たす素性は本来 **C/Force** にあり、(英語では) **A'** 位置であるその指定部要素と一致するという長谷川(2008)の主張を踏まえると、動詞句外

(58)



*c-統御

(ただし、(58)で、PRO = the students of linguistics)

また、本稿の分析では（左方）移動するのは PP であり、動詞句外 there 構文の派生で DP の右方移動を仮定する必要がない。例えば、中島(1996)は意味上の主語がスペルアウト後に TP の指定部から右方移動することにより動詞句外 there 構文が派生されると主張し、また、Nishihara (1999)は意味上の主語が重名詞句転移(Heavy NP Shift)により右方移動することで動詞句外 there 構文が派生されると提案している。しかし、名詞句の右方移動は Kayne (1994)に代表されるような右方移動や右方付加を禁止する仮定にそぐわないばかりか、「後置」される意味上の主語は「軽い」ものでも構わないという事実がある。このことは(59)に例示されている。

- (59) a. As we rushed to prepare to open the Sale there appeared in our midst *an unknown young man*.
b. It was a precious respite; for during it there arose in Greece *the democracy of Athens*.

(a-b: BNC ; イタリックは筆者による)

there 構文では A 位置にある PP がその素性の照合に関与するという問題が生じる。このことについては今後の検討課題としたい。

c. There darted into the room *a little boy*.

(Levin (1993); イタリックは筆者による)

このような提案に対して、本稿の分析では PP が左方移動し結果的に意味上の主語が「後置」されることから、動詞句外 *there* 構文の派生には右方移動が関与しないことになり、Kayne (1994)の右方付加や右方移動が許されないという提案にも合致する。そして、重名詞句転移はこの構文の派生には関与しないのだから、意味上の主語が「軽い」ものであっても許されることが導き出せる。

5. まとめ

本稿は Collins (1997)の場所句倒置構文の分析と長谷川(2008)の提示文、特に英語の場所句倒置構文の分析を動詞句外 *there* 構文の分析に援用し、この構文の派生には動詞の T への移動と PP の [Spec, vP]への左方移動が関与していることを提案した。2 節で概観した長谷川(2008)の場所句倒置構文の分析と、本稿で提案した動詞句外 *there* 構文の派生をまとめると(60)のようになる。

(60)

	英語の場所句倒置構文 (長谷川 (2008))	英語の動詞句外 <i>there</i> 構文
PP の移動先	[Spec, ForceP]	[Spec, vP]
V の移動先	Fin	T
文のタイプ	提示文	提示文

(60)の表の中で PP の移動先に着目して場所句倒置構文と動詞句外 *there* 構文を比較すると、前者ではそれが vP よりも上位の [Spec, ForceP]であり、後者ではその移動先は [Spec, vP]であることがわかる。言い換えると、これまで多くの議論がな

されてきた場所句倒置構文は「vP 外場所句倒置構文 (vP-external locative inversion)」であり、英語の動詞句外 there 構文は「vP 内場所句倒置構文 (vP-internal locative inversion)」であると結論できる。

参考文献

- Aissen, J. (1975) "Presentational *There*-Insertion: A Cyclic Root Transformation," *CLS* 11, 1 – 14.
- Baker, M. (1988) *Incorporation: A Theory of Grammatical Function Changing*, University of Chicago Press.
- Bresnan, J. (1994) "Locative Inversion and the Architecture of Universal Grammar," *Language* 70, 72 – 131.
- Collins, C. (1997) *Local Economy*, MIT Press.
- Coopmans, P. (1989) "Where Stylistic and Syntactic Processes Meet: Locative Inversion in English," *Language* 65, 728 – 751.
- Emonds, J. (1976) *A Transformational Approach to English Syntax: Root, Structure-preserving, and Local Transformations*, Academic Press.
- Hasegawa, N. (2005) "EPP Materialized First, Agree Later: *Wh*-questions, Subjects and *MO* 'also'-phrases," *Scientific Approaches to Language* 4, 33 – 80, Kanda University of International Studies.
- 長谷川信子 (2007) 「1 人称の省略：モダリティとクレル」、長谷川信子 (編) 『日本語の主文現象』、331 – 369、ひつじ書房。
- 長谷川信子 (2008) 「提示文としての中立叙述文」、金子義明・菊地朗・高橋大厚・小川芳樹・島越郎 (編) 『言語研究の現在』、62 – 80、開拓社。
- Kayne, R. (1994) *The Antisymmetry of Syntax*, MIT Press.

- 久野暲 (1973) 『日本文法研究』、大修館。
- Levin, B. (1993) *English Verb Classes and Alternations: A Preliminary Investigation*, University of Chicago Press.
- Levin, B. and M. Rappaport Hovav (1995) *Unaccusativity: At the Syntax – Lexical Semantics Interface*, MIT Press.
- Lumsden, M. (1988) *Existential Sentences: Their Structure and Meaning*, Croom Helm.
- Milsark, G. L. (1974) *Existential Sentences in English*, Ph.D. dissertation, MIT.
- 中島平三 (1996) 「多重主語構文としての場所句倒置」『英語青年』142, 18 – 22.
- Nishihara, T. (1999) “On Locative Inversion and There-Construction,” *English Linguistics* 16, 381 – 404.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman.
- Radford, A. (1997) *Syntactic Theory and the Structure of English: A Minimalist Approach*, Cambridge University Press.
- Rizzi, L. (1997) “The Fine Structure of the Left Periphery,” ed. by L. Haegeman, *Elements of Grammar*, 281 – 331, Kluwer.
- 高見健一・久野暲 (2002) 『日英語の自動詞構文』、研究社。

261-0014

神田外語大学

言語科学研究センター

nkamiya@kanda.kuis.ac.jp